

# 平安時代における女性美の演出について

金賢貞\*

## 目次

1. 序
2. 教養の面における女性美の演出
3. 外見の面における女性美の演出
4. 道具を用いた女性美の演出
5. 結

## 1. 序

女性の美しさへの渴望は昔も現代もさほど変わらないと思われるが、その表現の仕方には大変大きな差がある。昔の女性も化粧はしていたが、その化粧法は現在と大きく違うし、自分の美を演出する方法にも大きな差が見られる。例えば、仮名が早く発明されて書道や和歌が女性の教養の中で最も重要な項目であったことや、十二単という日本独特の色彩感覚あふれる服装で美を表わしたことなど、平安時代における女性美の演出法に對しては大変興味深いものが多い。

そのような女性美の演出については當時の文學作品の中に大変よく現れており、演出法だけではなく、當時の人々の考え方や生活全般に關することにとるまで数多くの情報が得られる。本稿では、平安時代における様々な文學作品の中に見られる女性美の演出法を中心に、當時の人々の美意識やほかの時代とも異なる平安時代だけの獨特的な美的演出について考察してみたいと思う。女性美の演出法の研究にも様々な方面からの接近ができると思うが、今回はまず女性の一般教養の面における女性美の演出法について考察し、次に顔や化粧、服装などの外見の面において、最後に女性美の演出に欠かせない様々な道具による演出法について考察してみるつもりである。

\* 韓國傳統文化學校 助教授

## 2. 教養の面における女性美の演出

平安時代は男の教育のための機関はあったが、女性が學問や教養を習うことができる學校や機関が特にあったわけではない。そのため、女性たちは家庭内で學問や教養のための教育を受けたのである。

女性の一般教養と言えば、琴などの音樂や裁縫、染色などがある。さらに、日本では仮名が早く發明され、中古時代から貴族を中心に書道が女性たちの間でも大変流行ったし、これがまさに當時女性美をあらわす最も重要な手段でもあったということは日本の特徴と言えよう。仮名の發明により、平安時代には數多い女流作家が誕生し、物語や日記、和歌にいたるまで日本古典を代表する優れた作品が多く書かれたのは周知のことである。

『枕草子』には次のような話もある。「手よく書き、歌よくよみて、もののをりごとにもまづ取り出でらるる、うらやまし。」<sup>1)</sup>つまり、書道がうまくて和歌をよく知っており、状況にあわせて適切に使える女性は大変羨ましい存在であったのである。

ここで、仮名を書くだけでなく、和歌や書道が上手であることが女性の必須教養であったことは興味深いことである。當時の女性たちは仮名を使って和歌を作ったり、日記や物語を書いたりした。特に、和歌の上手さと筆跡の美しさは當時女性美を表わす最も重要な手段であったので、當時の女性たちの教養として書道が最も重視されていた。當時の女性は外出はもちろん、男の人とは家族であっても顔をあわすことがほとんどなかったので、最も重要な意思の伝達手段が文や和歌だった。當時女性は本人の顔や外見よりもむしろ自分が書いた文や和歌が人に見られることが多かったし、そのためそれらが本人のかわりに外見や人柄などを表現するようになったのである。

當時は文といっても日常的な言葉を書くのではなく、和歌で手紙を書くことが多かったし、日常生活の中でも和歌でやりとりをすることが多かった。つまり、當時和歌は本を讀んだり學問をする時だけ使われたのではなく、日常生活の中になくしてはならない重要な存在だったのである。そして、この和歌は當時の女性にとって知性美を演出するのに欠かせないものでもあった。そのため、當時の女性はたくさんの和歌を暗記し、さらに自分でも四季と状況にあわせて適切に和歌を作ることができる能力を備えなければならなかった。

村上の御時に、宣耀殿の女御と聞えけるは小一條の左の大殿の御むすめにおはしけると、誰かは知りたてまつらざらむ。まだ、姫君と聞えけると、父おとどの教へきこえたまひけることは、  
『一つには御手を習ひたまへ。次には琴の御琴を、日とよりことに弾きまさらむとおぼせ。さては古今の歌二十卷をみな浮かべさせたまふを御學問にはせさせたまへ』となむ聞えたまひけるを、<sup>2)</sup>

1) 新編日本古典文學全集本『枕草子』 小學館 1999, p.278

2) 注1と同じ、p.59

ここで宣耀殿の女御というのは藤原師伊の娘の芳子のことである。この芳子がまだ幼い時父が話した言葉であるが、第一に習字を習うように言っている。次が琴を人より上手に弾くことで、その次は古今集の歌二十巻を全部暗記することである。古今集の二十巻の歌はすべて相当な数で、それをまる暗記するというのは大変な学習を必要とする。しかし、帝が芳子を試してみたところ、一つも間違わず答えたと記録されている。このように、当時の女性にも學問によって体得された知性美が必要とされたのである。

字や和歌がうまいからと言ってただ手紙を書いて送ればいいわけではなく、相手に和歌を送る時はそれに似合うような紙や墨の色を工夫しなければならなかったし、場合によっては花や切り枝をそえてより風情を際立てた。このような例は『伊勢物語』に数多く出てくる。十八段には「女、歌よむ人なりければ、心みむとて、菊の花のうつろへるを折りて、男のもとへやる」とあるし、二十段には「かへり来る道に、三月ばかりに、かへでのもみちのいとおもしろきを折りて、女のもとに、道よりいひやる」<sup>3)</sup>などがあり、当時の手紙のやりとりをする時自分の美的センスをよくあらわすものとして文學作品の中でも多く使われている。

また、『源氏物語』で末摘花が源氏に送った手紙を見ると、「紫の紙の年の経にければ灰おくれ古めいたるに、手はさすがに文字強う、中さだの筋にて、上下ひとしく書いたまへり。」<sup>4)</sup>とあり、紙などがあまりにも古くて工夫がなく、末摘花の古風で男に對する心得のない性格をそのまま表すような内容で、源氏は返事をする氣もうせる。もしこの場合、末摘花がいくら器量が悪くても歌や筆跡が上手で手紙をセンス良く送ることができたら、少なくとも顔を實際見る前までは大変な美人と思われたに違いない。つまり、當時は筆跡がその人の器量と人柄にいたるまですべてを代表していたので、書道が重視されたのは當然のことである。そのため、当時の女性は化粧をする以上に書道に全力を注がざるを得なかった。

當時も書道はいい手本を見て、それをまねて書くのが普通であったので、有名な人の書いたものや自分がもらった文や筆跡の美しい身近な人のものを手本にして書く練習をした。『源氏物語』で源氏が若い紫の上に送った文があまりにも見事なので、女房たちは「やがて御手本に」<sup>5)</sup>とそれを手本にして書く練習をするように勧める。

このように筆跡が重視されるしかなかった理由は、当時の戀愛文化にも原因がある。當時仮名で書かれた文や和歌は、戀愛やそれが發展して結婚にいたるまで、また結婚生活の中でも男と女をつないでくれる大変重要な役割を果たしていた。戀愛をしようと相手を選ぶ時、男は女の顔を見ることができなかったので、顔も知らない女の人の美しさを判断する唯一な手段としてその女性が書いた文や和歌の筆跡が使われたのである。そのため、顔も知らない女の人でも、その筆跡が美しいと大変な美人に思い、惚れて積極的に求婚することが多かった。さらに、付き合

3) 新編日本古典文學全集本『伊勢物語』 小學館 1994, p.130

4) 新編日本古典文學全集本『源氏物語』 小學館 1994, p.287

5) 注4と同じ, p.239

うことになるまでの経緯にも、付き合った後にも男女のやりとりはほとんど手紙で行われたので、筆跡の美しさと和歌の上手さは必然的に重要な意味を持たざるを得なかったのである。

次に、楽器の面について考察してみたいと思う。当時代表的な楽器と言え、琴があった。琴には平安時代以後の文學にあらわれる和琴（六絃）・箏（十三絃）・琵琶（四絃）のほか、正倉院御物によって知られる七絃琴、十二絃の新羅琴、百濟琴などがある。日本古來の琴以外に様々な絃楽器が渡來したため、在來のものは和琴、それ以外を琴の琴、箏の琴、琵琶の琴などと称した。奏法の中では琴が最も難しく、次いで和琴、箏の順とされている。<sup>6)</sup>

このような琴や琵琶などの楽器を上手に弾けるような教養を身につけることは、美しい女性と認められるために必要であった。美しい楽器を演奏する音は、當時人前に姿を見せることのできない女性たちにとって、その人の美しさをそのまま代弁するような役割をしていたのである。つまり、外部の人に自分の美しさを最も効果的に演出するためには、琴や琵琶などの楽器が上手に弾けるようにしなければならなかったのである。

琵琶や琴は物語の中でも頻繁に登場する。例えば、『夜の寢覺め』の女主人公は琵琶の名手で、冒頭には天人が天下って琵琶を伝授するという話がある。

小姫君の御夢に、いとめでたくきよらに、髪上げうるはしき、唐繪の様したる人、琵琶を持て来て、「今宵の御箏の琴の音、雲の上まであはれに響き聞こえつるを、訪ね參で來つるなり。おのが琵琶の音弾き伝ふべき人、天の下には君一人なむものしたまひける。<sup>7)</sup>

當時の人々にとって楽器を上手に演奏することは大変重要な意味を持つものであったが、季節によって似合う楽器のイメージがあったらしく、『更級日記』では、

春秋のことなどいひて、「時にしたがひ見ることには、春霞おもしろく、空ものどかに霞み、月のおもてもいと明うもあらず、遠う流るるやうに見えたるに、琵琶の風香調ゆるかに弾きならしたる、いとみじく聞こゆるに、また秋になりて月いみじう明きに、空は霧りわたりたれど、手にとるばかりさやかに澄みわたりたるに、風の音、虫の音、とりあつめたる心地するに、箏の琴かきならされたる、横笛の吹き澄まされたるは、なぞの春とおぼゆかし。また、さかと思へば、冬の夜の、空さへさえわたりいみじきに、雪の降りつもりひかりあひたるに、篳篥のわななき出でたるは、春秋もみな忘れぬかし<sup>8)</sup>

これは源資通が春愁論を含んで楽器と季節の調和について語る場面であるが、春は琵琶、秋は箏・横笛、冬は篳篥がよいと話している。いずれにしても、季節と音楽、美と音楽の関係は

6) 秋山虔・編 『王朝語辭典』 東京大學出版會 2000, p.174

7) 新編日本古典文學全集本『夜の寢覺め』 小學館 1999, p.17

8) 新編日本古典文學全集本『更級日記』 小學館 1994, p.334

大変緊密なものであったに違いない。

さらに、楽器を演奏する音だけを聞いてその人の美しさを判断するという話は、当時の文献から数多く見られる。例えば、

「聞き知る人こそあなれ、ももしきに行きかふ人の聞くばかりやは」とて、召し寄するも、あいなう、いかか聞きたまはむと、胸つぶる。ほのかに掻き鳴らしたまふ。をかしう聞こゆ。なにばかり深き手ならねど、物の音がらの筋ことなるものなれば、聞きにくくも思されず。<sup>9)</sup>

これは源氏がある姫君を噂だけを聞いて、十六夜に直接訪ねるという場面である。その姫君は『源氏物語』の中でも醜い容貌で有名な末摘花であるが、源氏はまだ顔も見えてない姫君の容姿を、琴の音を聞いて勝手に想像し、心をときめかすのである。しかも、これは女房が源氏が来ているのを知って、何も知らずにいる末摘花に楽器を演奏するように勧めての話であり、楽器の演奏が女性美の演出にどれだけ重要な意味を持っていたかよくうかがえる例と言える。

また、『狭衣物語』には「箏の琴、緒いたうゆるびたるを盤渉調に調べて、わざとなくしのびやかなる、絶え絶え聞こえたる、おしなべてのには似ず、なつかしうをかきなるは」<sup>10)</sup>とあり、女二の宮との縁談に心進まなかった狭衣が彼女の弾く琴の音に魅せられ、結局契りを結ぶようになる。このように、楽器の演奏は女性美を演出するのに大変重要な役割を果たしていた。興味深いのは、当時男の人でも楽器は演奏したが、男女が会う場面ではほとんど女の人が楽器を演奏し、その音に魅せられて男が忍び寄るというパターンが物語の中ではほとんどである。

次に、女性美を考察する時欠かせない服飾について考察してみたい。当時は女性たちが人前に顔をさらすようなことはほとんどなかったが、それでも身分を表わしたりその人の美しさを表現したり、さらにその人の人柄までもあらわすなど、服飾は大変重要な意味を持つものであった。

当時女性の教養としては、音楽や書道以外にも裁縫、染色が重要視されていたが、古代から女性は布や糸、衣装をすべて自分で作るのが一般的であった。特に中古時代以後の衣装は様々な色を重ねて着る華麗で美しい服であったため、単に服を作るだけではなく、そこにはかなりの色彩感覚も必要だったし、服の用途にあわせて上手に、そしてきれいに作り上げる能力が必要とされたのである。

『宇津保物語』の「吹上」の段を見ると、織物・縫物・染物をする所とその様子が詳しく書いてある。

ここは、織物の所。機物ども多く立てて、織り手二十人ばかり居たり。色々の織物どもをす。これは、染殿。御達十人ばかり、女の子ども二十人ばかり、大きな鼎立てて、染草色々に煮る。

9) 新編日本古典文学全集本『源氏物語』 小學館 1994, p.268

10) 新編日本古典文学全集本『狭衣物語』 小學館 1994, p.268

台どもふきに据ゑて、手ごとに物ども据ゑたり。槽どもに女の子ども下り立ちて、染草洗へり。これは、打ち物の所。御達五十人ばかり、女の子ども三十人ばかりあり。巻き、前ごとに置きて、手ごとに物巻きたり。いかめしき碓に、男女立ちて踏めり。これは張り物の所。巡りなき大きな檜皮屋。裃、袴着たる女ども二十人ばかりありて、色々の物張りたり。これは縫物の所。若き御達三十人ばかり居て、色々の物縫へり。これは、糸の所。御達二十人ばかり居て、糸繰り合わせなど手ごとにす。織物の糸、組の糸など、竿ごとに練りかけたり。唐組、新羅組、ただの組など、色々にしたり。11)

これは人々の歸京に際して、豪華な贈物をするため必要なものを用意している場面である。織物、縫い物、染め物、布の張り、糸にいたるまで服ができあがるすべての過程が手作業で行われている。

確かに当時の女性にとって縫い物を上手にしたり、色彩感覚にすぐれてきれいな服をつくることができるというのが、自分の女性としての能力や美を人に見せるため非常に重要な意味を持っていたので、女性たちは色染めの技や色あわせの知識などを身につけてうまく衣装を作り上げることに専念した。技や知識を最大限に發揮して自分を最も美しく見せる服を作ることも重要であったが、さらに旦那や家族をよりすばらしく見せると同時に用途にもぴったりあう服を作っておけることも必要だったので、女性たちは糸からはじめ織物、染め色や縫い物にいたるまですべてにかけて全力を注がざるを得なかったのである。

このように服飾が人柄やその人をとりまく様々なものをよく表せているものであるため、ある人物の美しさを描寫する時その人がつけている服飾をもあわせて表現するのは當然のことであろう。次は『狭衣物語』で源氏の宮の美しさを描寫する場面である。

御額髪のゆらゆらとこぼれかかりたまへるに、裾はやがて後ろと等しく引かれゆきて、いとあえかなる御單衣の裾にこちたげにたたなはりゆきて、裾の削ぎめはなやかに見えたまへる、いつを限りに生ひゆかんと、所せげなるものから、あてになまめかしう見えたまふ。12)

さらに、『紫式部日記』には「丹波の守の童女の、青い白椽の汗衫、をかしと思ひたるに、藤宰相の童女は、赤いろを着せて、下仕への唐衣に青いろををしかへし着たる、ねたげなり。」<sup>13)</sup>とあり、童女たちの美しさを衣服を通じて描寫している。

興味深いのは『源氏物語』に源氏が正月の衣装を自分の女たちに送る場面があるが、その人の外見や人柄にあわせて衣装を選んで送りながら、「いで、この容貌のよそへは、人腹立ちぬべきことなり。よきとても物の色は限りあり、人の容貌は、後れたるも、また、なほ底ひあるもの

11) 新編日本古典文學全集本『うつは物語1』 小學館 1999, p.417

12) 新編日本古典文學全集本『狭衣物語』 小學館 1994, p.57

13) 新編日本古典文學全集本『紫式部日記』 小學館 1994, p.179

を」14)と言っていることである。つまり、いくら優れていてもものの色あいには限りがあるが、人の容貌はいくら劣っていても奥の奥があるということで、女性の美しさを判断する時の心得をよく見せてくれている。

### 3. 外見の面における女性美の演出

今まで考察したように、平安時代の女性は自分本人より人に見せる機会がもっと多い書道などを大変重視していたが、だからといって外見の美しさがまったく無視されたわけではない。文献や物語には女性の外見の美しさに對して細々と描寫している場面が數多く見られるし、女性たちも化粧をしたり髪のをのぼしたりして外見を磨くことにも一生懸命だったのである。

例えば、『浜松中納言物語』にはこのような場面がある。

御年二十ばかりやおはすらむとおぼえて、御顔のやうたい、細くもあらず、ふくらにもあらず、よきほどなるが、中すこし盛りたる心地して、御色の白さは、はりせらむといふとも、これにはまさらざりけむとおぼゆるに、あいぎやう、いみじくにほひかをりて、眉ものよりけだかく見なし給ふに、くちびるは丹といふもの塗りたるやうに、いささかもねぢけたるところなく、あたりまでにはほひて、髪上げうるはしき御さまにて、のどかになかめ出でつつ琴を弾き給ふ。この世にかかることを見るや、と、あさましきまでおぼゆ。15)

唐國で出會った後の顔の美しさが非常に細々と書かれているし、容姿や香のすばらしさなどについてよく描寫されている。物語では特に女や男主人公のきれいさを描寫する時細かい描寫でその美しさを十分表現しようと努める傾向が強い。このように、男の外見はもちろんとして、普段めったに人前に姿を見せる機会のない女性でも、外見のすばらしさが大変重要視されていたのは確かである。

外見に美しくなるために、女性たちはみんな努力をおしまなかつたはずであるが、その努力の中で最も基本になるのが化粧であろう。化粧というのは日本の縄文や弥生時代の時から原始的な形で存在していたのが入れ墨や裝飾などから確認できる。古代にさかのぼるほど化粧は民間信仰や風習などと密接なかわりを持っており、巫女などもそれにふさわしく化粧をしていたとみられる。16)美意識を伴った化粧は6世紀後半隋、唐から仏教とともに紅や白粉、香などの化粧品の作り方が伝わった以後から本格的に始まってだんだん發展していったわけである。最初は唐

14) 新編日本古典文學全集本『源氏物語』 小學館 1997, p.136

15) 新編日本古典文學全集本『浜松中納言物語』 小學館 2001, p.40

16) 秋山虔・編『王朝語辭典』 東京大學出版會 2000, p.164

風の立体的で全身的な化粧法が流行ったが、平安時代にいたっては日本の独特な化粧法に変わっていくのである。17)

平安時代では化粧のことを「顔づくり」と言っていた。當時は男も身分高い人は化粧をしていたが、主に化粧をするのはやはり女性であった。色白の人が美しいとされるのは現代でも変わらない美的感覚で、当時の人も男の人まで顔を白く見せるために白粉を顔に塗ったのである。白粉の種類には様々なものがあつたが、主に鉛が主原料の京白粉と水銀が主原料である伊勢白粉が使われた。このほかにも米の粉が原料のものもあつたが、これは質の劣るものと考えられた。18) このような考え方は現代と大変違うもので、現代ではむしろ米の成分が肌がいいとされ、せっけんや化粧品に使われているし、鉛や水銀を顔に塗るなんてことは信じられないのである。しかし、當時は科学的な知識が乏しかったため、鉛や水銀の毒で肌をだめにしたり病氣になつたりする人が多かつたと思われる。

この白い顔とは対照的に、當時の人々は男女とわずみんな歯を黒く染めていた。この歯黒めはその起源は明確ではないが、平安時代に始まって近世時代まで續いた。お歯黒は古い鐵を器の中に入れて米屑を少量の清水に混ぜて漬け、夏は三日、冬は七日間、暖かい所に置くと錆汁が出る。別に五倍子を粉末にして歯に塗り、そこに錆汁をつけることを數回繰り返して歯を黒くしたのである。19) 歯を黒く染めることは化粧の重要な一つで、美しく見せるためには欠かせないことだったが、また一方では虫歯を予防する効果もあつた。昔は歯を磨くことがあまりなかつたので、鐵を酸化させた水で歯を黒く染める風習は齒莖を丈夫にして、歯に異物が入って虫歯になるのを防ぐ効果も持っていたのである。

もう一つ化粧の重要なポイントとなるのが眉である。これも中古時代に始まって中世まで續いた化粧法であるが、中古時代には成人になった女性はみんな元の眉をすべて抜いて元の眉より上の額の部分に眉を描いていた。時代が流れるにつれて眉の流行も多く変化していくようになる。鎌倉時代以降は暈染、茫茫眉などの様々な形が流行った。眉を描く掃墨には油煙、紫草の花の黒焼、金粉を胡麻油でこねて作つたものなどが使われた。

眉の話となると、すぐ思い浮かぶ話が『堤中納言物語』の「はいずみ」であろう。

櫛の箱を取り寄せて、白き物をつくと思ひたれば、取りたがへて、掃墨入りたる疊紙を取り出でて、鏡も待たず、うちさうぞきて、20)

久しぶりに眞晝間に訪ねてきた男を迎えるために、女はあわてて化粧をするが、あわてすぎ

17) 『日本民俗大辭典 上』 吉川弘文館 1999年

18) 『美の世界・雅びの繼承』(「源氏物語講座」) 勉誠社 1992, p.107

19) 『後宮のすべて』(「國文學」) 學灯社 1980年10月號 p.185

20) 新編日本古典文學全集本『堤中納言物語』 小學館 2000, p.496

て白粉と掃墨を反対に塗ってしまうのである。顔はまだら模様に黒くなって、目だけぱちくりさせている女の姿を見て男はあきれて歸ってしまうという大変滑稽な話である。

また、「虫愛づる姫君」にはこのような話もある。

「人はすべて、つくろふところあるはわろし」とて、眉さらに抜きたまはず。齒黒め、「さらにうるさし、きたなし」とて、つけたまはず。いと白らかに笑みつつ、この虫どもを、朝夕べに愛したまふ。人々おちわびて逃ぐれば、<sup>21)</sup>

この姫君は非常に独特な美意識を持っており、自然のままがいいとして、眉は抜かず、齒も黒く染めないで白い齒を見せて笑う上、みなが嫌う虫をこよなく愛するという非常に変わった人物である。このように眉も抜かないで、お齒黒もしない女性は、変わり者の扱いを受け、誰も美しく見てはくれなかったのである。このような美的感覚は現代とは全く逆だし、さらに日本だけの特徴とも言える。

化粧の仕上げは紅である。紅は口につけるものと頬紅の二種類があるが、紅の原料となるものは現在でも使われている紅花という花である。この花卉の汁に梅酢を加えて乾燥させたのが紅で、これを唇に塗るほかに頬にもさしたのである。<sup>22)</sup>

化粧するのに必要な化粧道具は箱に入れて保管していた。鏡や櫛、それ以外の化粧道具は豪華に作られた箱に、さらに薫物なども香箱という箱に入れて保管していた。

今まで考察してきたものには現代とはだいぶ異なるものが多いが、特に女性美の面において際立つ特徴を見せるのが髪の毛の長さに対する美的感覚である。

當時は成人式とともに男女とも髪型を変えたが、男は總角をやめて冠をかぶり、女は髪上げをした。特に女性の髪の毛は、その人の美しさを象徴するようなもので、理想的な髪は長く豊かな黒髪であった。長ければ長いほどいとされたので、成人式を終えた女性はみんな髪の毛を切らずに伸ばして、髪の毛が身長以上に及ぶことが普通であった。<sup>23)</sup>

これをよく見せてくれる例が『大鏡』にある。

御女、村上の御時の宣耀殿の女御、かたちをかしげにうつくしうおはしけり。内へまゐりたまふとて、御車に奉りたまひければ、わが御身は乗りたまひけれど、御髪はすそは、母屋の柱のもとにぞおはしける。一筋を陸奥紙に置きたるに、いかにもすき見えずとぞ申し伝へためる。<sup>24)</sup>

村上天皇の女御である芳子の美しさを描寫している場面であるが、特にその髪の毛の長さが

21) 注16と同じ。p.408

22) 『王朝女流日記必携』(「別冊國文學」)學灯社1986, p.148

23) 秋山虔・編『王朝語辭典』東京大學出版會2000, p.127

24) 新編日本古典文學全集本『大鏡』「師伊」小學館1996, p.118

大変なもので、体は御輿に乗っているのに、髪のスそはまだ母屋の柱のもとにあるほどであった。しかも、一筋を紙の上において見ても隙間がまったく見えないぐらい量が多く、豊かな髪であったことがわかる。これがまさに理想の髪の毛の条件のようで、この美しさに村上天皇の寵愛も相当なものであったと書かれている。

このように髪の毛の長さは女性が自分の美しさを表現するのに、非常に重要な意味を持っているものであったが、俗世を捨てて出家をすると、このように長い髪の毛も肩のあたりで切り落とした。髪の毛が切られたその時から女として見られることや、美しさに對する努力すべてをやめてひたすら仏教に専念するということになる。このように當時は髪の毛は女性の美そのものを象徴していた大変重要なポイントだったのである。

しかし、このように髪の毛が長いと、その手入れや洗髪はかなり難しくなる。長い髪の毛は末の方を切り揃えて腰のところで一回結んでととのっていたし、櫛を通したりして飾った。髪の毛が長い分、洗髪は大変なことだったが、米をといだ水を髪につけて櫛を通して汚れを取る、いわゆる「梳り」をした。このような米のとき汁を髪に毛につけて櫛を通すと、髪の毛もきれいになるし、長くなる効果もあると信じられていた。<sup>25)</sup>

しかし、當時流行った陰陽道では「四、五、九、十月は髪の毛を洗うのを忌むべき月」と言われていたし、さらに個人によって髪の毛を洗ってはいけないとされる日があったので、洗髪は日常的なお手入れということにならない。しかも、その長さや量が相当なものなので、身分の高い人は女房にまかせたり、身分の低い人はお互い手入れをしてあげたりした。<sup>26)</sup>

中世・近世期になると、化粧や髪型は中古時代よりももっと多種多様になっていき、時代や階層によってそれぞれ異なった化粧法や髪型を見せるようになる。

## 4. 道具を用いた女性美の演出

昔は洗髪や沐浴、齒を磨くことなどはまめにしなかったし、排泄物の処理やごみの処理なども現代のようにきれいにできなかったので、体臭や口臭、生活の中での悪臭などで大変だったと思われる。そのためであろうか、中古時代には香の文化が非常に發達するようになったが、これがまた個人の美を演出するのに重要な役割をしていたのである。日本で香を用いた最も古い記録は『日本書紀』の皇極元年六月の條に

於<sub>二</sub>大寺南庭<sub>一</sub>、嚴<sub>三</sub>仏・菩薩像<sub>与</sub>四天王像<sub>一</sub>、屈<sub>二</sub>請衆僧<sub>一</sub>、讀<sub>二</sub>大雲經<sub>等</sub>。于<sub>レ</sub>時蘇我大臣手執<sub>二</sub>香鑪<sub>一</sub>、燒香發願<sup>27)</sup>

25) 『日本民俗大辭典 上』 吉川弘文館 1999年

26) 『平安貴族』(「日本歴史シリーズ」4) 世界文化社 1967, p.99

と書いてあるものである。

化粧をするのと同じように、人と顔をあわす時、特に男女が会う時は香を服や髪の毛に染み込ませるのが習慣であった。元來日本の古代人は、その氣候風土の関係から、清楚感を好み、むしろ無臭の空間を大切にする傾向があった。ここに仏教が渡來し、多少麻薬の効果を含む「薫香」が入ってきた時には、異香として驚きをもって迎えられたものと思われる。しかし、すぐその香になじむことになり、当初宮廷や貴族から寺院への獻物として捧げられていた香木の類は、次第に宮廷や貴族の生活圏へ浸透していったのである。薫香の原料となる香木、香料としては沈香、麝香、白檀、薰陸香、占唐香、甲香、甘松香、丁香、鬱金香、安息香、蘇合香などが用いられていた。ほとんどがインド、東南アジアの産であり、これらはシルクロード、中國經由で日本に輸入されていた。<sup>28)</sup>

薫物は、香木や香料を臼や杵などを用いて粉末にし、それを蜂蜜や甘葛で練り合わせて作り、香箱などに保存した。薫物の調合法には大変様々な方法があり、秘伝や口伝のものも多かった。このようにしてできた薫物は固いので、今の香水のように直接かけることはできなかった。そのため、伏籠という金属製の籠を伏せてその上に衣をかけた、服を着たまま袖口などに小型の香爐をさし入れて使う場合もあった。<sup>29)</sup>

『源氏物語』の「眞木柱」には鬚黒が愛人のもとに行くため装束を整えて、北の方が自ら袖に香をたきしめるなどしていた夫の支度を手伝っているうちに突然嫉妬のため錯亂し、「にはかに起き上がりて、大きな籠の下なりつる火取をとり寄せて、殿の背後に寄りて、さと沃かけたまふ<sup>30)</sup>」という有名な場面がある。このように、一夫多妻制の當時は愛人に会いに行く夫のために、奥さんが薫をたきしめたりして支度を手伝わざるをえなかったのである。

いずれにせよ、当時において人と会う時のマナーとして香が必要だったが、これが非常に種類が多くて、個人の美しさや個性を表わすことにも重要な役割をしていた。これは現代でも同じであるが、異性の香の匂いに魅力を感じることが多いので、当時でも男女が戀愛する時や自分の美を最大限にアピールしたい人にとって香は欠かせないものであったと言えよう。『枕草子』の「心ときめきするもの」の段を見ると、

頭洗ひ化粧じて、香ばしうしみたる衣など着たる。ことに見る人なき所にて、心のうちは、なほいとをかし。<sup>31)</sup>

27) 新編日本古典文學全集本『日本書紀3』 小學館 1998, p.64

28) 『美の世界・雅びの継承』(「源氏物語講座」) 勉誠社1992, p.87

29) 『平安貴族』(「日本歴史シリーズ」4) 世界文化社1967, p.99

30) 新編日本古典文學全集本『源氏物語3』 小學館 1980, p.365

31) 新編日本古典文學全集本『枕草子』 小學館 1999, p.69

とある。また、五七段には

また、さて行くに、薫物の香いみじうかかへたるこそ、いとをかしけれ。<sup>32)</sup>

と書いてある。このように、當時の人は人の香に心をときめかせ、家の前を通る時薫物の香がただよってくることに風情を感じていたのである。

このように化粧ほど美の演出に香が重要な役割をしていたため、当然香に対する美的感覚や文化は貴族の中で大変發達した。これは香合という遊びの文化にもなったが、香合とは二種の香木をたいて、その匂いや香銘の優劣を競う合わせ物の一種のことである。このように中古時代から發達した香の文化は中世を経て、現代までも異なる形で續いているのである。

女性をより美しく演出させるのに重要な役割をしたのは、ほかにもたくさんあるが、古代の特徴的なものとしては御簾や御帳にかけた几帳があげられる。御簾は現代のすだれとほぼ同じであるが、細く割いた藁や竹を編み重ねて垂らした屏風具のことである。絹で四方の縁をとり、上下両端には形がくずれぬよう小端という薄板が芯として入っている。上部には一幅の絹を横に引き渡した帽額や、巻き上げた時に掛けてとめておくための半円型の金具、鉤が備えてある。適度の採光、通風が可能で、さらに内側から外は見えるが、外から見通しにくいという利点があったので、四季を通じて用いられ、牛車、輿などの出入り口にも利用された。<sup>33)</sup>

女性の美しい姿を描寫する時、服装や外見以外に簾やその人が持っている道具などとともに描寫すると、その美しさをより効果的に表現することができ、このような例も文學作品の中にししばし見られる。

母屋の簾に添へたる几帳のつまうちあげて、さし出でたる人、わづかに十三ばかりにやと見えて、額髪のかかりたるほどよりはじめて、この世のものとも見えず、うつくしきに、<sup>34)</sup>

御帳は元々寢所や性行爲をする時まわりを囲むようにして、土台に二つまたは四つの細い柱を立て、そこに几帳を垂らしたものである。几帳は主に古代から中世にかけて使われた屏障具のことで、箱形の土台の上に二本の椽を立て、これにT字形に横木をとりつけ、これに布を數條縫い合わせた帳を結び付けて垂らして使うものである。帳は夏用は表は生絹、裏は平絹の袷で、白泥で花鳥などを描き、冬用は平絹の袷で朽木形文様をつけたものが多かった。帳の上には巻き上げた時に結ぶための野筋とよぶ紐を一緒に垂らした。<sup>35)</sup>

御簾と同じように女性は身分が高い人ほど、親しい人との体面でもこの几帳を間において話

32) 注27と同じ。p.113

33) 秋山虔・編『王朝語辭典』東京大學出版會 2000, p.225

34) 新編日本古典文學全集本『梟中納言物語』小學館 2000, p.448

35) 『日本民俗大辭典 下』吉川弘文館 1999 p.465

をすることで、顔や姿を直接見せるのをはばかった。

『源氏物語』の「螢」巻には、源氏が螢兵部郷宮に美しい玉鬢の姿を螢を放ってほのかに見せるというおもしろい場面がある。

すべり出でて、母屋の際なる御几帳のもとに、かたはら臥したまへる。何くれと言長き御答へ聞こえたまふこともなく、思しやすらふに、寄りたまひて、御几帳の帷子を一重うちかけたまふにあはせて、さと光るもの、紙燭をさし出でたるか、とあきれたり。螢を薄きかたに、この夕つ方いと多くつつみおきて、光をつつみ隠したまへりけるを、さりげなく、とかくひきつくるふやうにて。にはかにかく掲焉に光れるに、あさましくて、扇をさし隠したまへるかたはら目いとおかしげなり。<sup>36)</sup>

御簾や御帳の几帳は、見えるようで見えないシルエット、衣装などをちらっと見せることで女性の美しさと神秘さを倍増させたが、似たような役割をするものに扇がある。扇は服飾と同じように当時の女性美の演出には欠かせないもので、種類には檜扇と蝙蝠扇があった。檜扇は檜の板の薄く削ったものを要でとめて、開いた上部を糸で綴じたものである。蝙蝠扇は木製の骨に紙を張ったもので、主として夏期に用いた。扇は元々夏に涼しくすると、顔を隠すためのものであったが、ほの見せることによって美しさをより引き立てるといふ当時一流の美的演出でもあったので、女房たちは服装と同じように、扇においても個性を競い合った。當時は男性も化粧をしていたように、貴族たちは男性でもこの扇で美しさを演出した。

『紫式部日記』の寛弘五年十月十六日の條を見ると、

心をつくしてつくりひけさうじ、劣らじとしたてたる、女繪のをかしきにいとよう似て、年のほどのおとなび、いとわかきけちめ、髪のスこしおとろへたるけしき、まださかりのこちたきがわきまへばかり見わたさる。さては、扇よりかみの額つきぞ、あやしくも人のかたちを、しなじなくも下りても、もてなすところなんめる。かかるなかにすぐれたりと見ゆるこそ、かぎりなきならめ。<sup>37)</sup>

ここでは、顔を隠した扇の上に出ている額の様子が、不思議に人の容貌を上品にも下品にも見せると書いてある。さらに、『源氏物語』には

裳の裾を引きおどろかしたまへれば、かはほりのえならずゑがきたるをさし隠して見かへりたるまみ、いたう見延べたれど、目皮らいたく黒み落ち入りて、いみじうはつれそそけたり。似つかはしからぬ扇のさまかなと見たまひて、<sup>38)</sup>

36) 新編日本古典文学全集本『源氏物語3』 小學館 1980, p.192

37) 新編日本古典文学全集本『紫式部日記』 小學館 1994, p.156

38) 新編日本古典文学全集本『源氏物語1』 小學館 1994, p.337

とある。源典侍が氣をひく源氏に對し、蝙蝠扇に顔を隠して流し目を送ったが、その扇が年に似合わず派手で、顔も年老いて美しさとは程遠い様子をユーモラスに書いているが、ここでも扇の選び方にも年や身分相應の美的感覺が必要だったことがうかがわれる。次の例もこのような事實をよく見せてくれている。

よしある女なりければ、よくておこせてむと思ひたまひけるに、色などもいと清らかなる扇の、香などもいとかうばしくておこせたる。ひき返したる裏のはしの方に書きたりける。<sup>39)</sup>

三條の右大臣が中將であった時、通っていた女に扇を頼んだところ、心のゆきとどいた女性にふさわしく、きれいで芳ばしい扇で、裏の方にはいい歌も添えているのを送り、男を感動させる。服装と同じように、扇はそれを持っている人の美しさや人柄などのすべてを代弁するような役割を果たしていた。さらに、當時は人にあらわに顔や姿を見せるよりも、扇や御簾や几帳などを利用してほの見せることによって、女性の美しさを神秘的に倍増させるという獨特な美的演出法があったのである。

このように女性の美しさの演出に欠かせない手紙や扇、服装などが文學作品を引き立てる大変重要な小道具として用いられている。さらに、女性の美しさを描寫する上で、このような演出法が適切に使われることにより、文學作品の質をより高め、それをより豊かなものにしていく。

## 5. 結

以上古代日本の女性美の演出法について様々な方面から考察してみた。色白で服のセンスや知性美をも重視することなどは現代にも通用する美的感覺であるが、古代日本ならではの獨特なものも多く、當時書かれた文學作品の中によくあらわれている。

人に顔を見られることより、文や和歌で自分の美を表わした時代であったため、書道や和歌の勉強に最前を盡くしたというのは興味深い演出法と言えよう。さらに、女性の教養の面で重視されたのは、琴や琵琶などの樂器を上手に演奏できる音樂の技である。また、服を糸や布からすべて自分で作っていたため、織物、染め色や裁縫などのわざを身につけることが必要とされたし、十二單という色彩感覺豊かな服で自分の美を表現するためには、色あわせに對する知識やセンスも必要とされた。

外見における美も重要視され、古代の女性は化粧や洗髪など外見を磨くことにも努力を惜しまなかったし、女性美の演出に大きな役割をする道具も多く、香、扇や御簾や几帳などが使わ

39) 新編日本古典文學全集本『大和物語』 小學館 1999, p.314

れていたが、これも日本の一流の美的演出法であったと言えよう。このような美的演出法は文学作品の中で物語の流れや人物表現、状況描寫などに大変効果的に使われており、平安時代の文学ならではの特徴を見せている。

## 【参考文献】

- 秋山虔・編 『王朝語辞典』 東京大学出版会 2000, p.174  
新編日本古典文学全集本 『源氏物語1』 小学馆 1992, p.342  
新編日本古典文学全集本 『夜の寝覚』 小学馆 1999, p.17  
新編日本古典文学全集本 『更級日記』 小学馆 1994, p.334  
樋口清之 『日本女性の生活史』 講談社 1986, p.90  
新編日本古典文学全集本 『枕草子』 小学馆 1999, p.59  
新編日本古典文学全集本 『うつほ物語1』 小学馆 1999, p.417  
新編日本古典文学全集本 『浜松中納言物語』 小学馆 2001, p.40  
『美の世界・雅びの継承』 (「源氏物語講座」) 勉誠社 1992, p.107  
『後宮のすべて』 (「国文学」) 学灯社 1980年 10월호, p.185  
新編日本古典文学全集本 『堤中納言物語』 小学馆 2000, p.496  
『王朝女流日記必携』 (「別冊国文学」) 学灯社 1986, p.148  
新編日本古典文学全集本 『大鏡』 「師伊」 小学馆 1996, p.118  
新編日本古典文学全集本 『日本書紀3』 小学馆 1998, p.64  
『平安貴族』 (「日本歴史シリーズ」4) 世界文化社 1967, p.99  
谷田関次・小池三枝 『日本服飾史』 光生馆 1993, p.78  
新編日本古典文学全集本 『徒然草』 小学馆 1995  
『日本民俗大辞典 下』 吉川弘文馆 1999 p.465  
新編日本古典文学全集本 『紫式部日記』 小学馆 1994, p.156

## 要 旨

平安時代の女性美の演出法については、古代日本ならではの独特なものも多く、それらが時代の流れや流行などの影響を受けながら徐々に変わって現代にいたっている。

女性の教養の面で重視されたのは、琴や琵琶などの楽器を上手に演奏できる音楽の技や書道、和歌の上手さである。これらは人に顔を見せることのできない女性たちの美しさを代わりにアピールするために大変重要な役割をしていた。さらに、当時の女性は服を糸や布からすべて自分で作っていたため、織物、染め色や裁縫などのわざを身につけることを必要としたし、十二単という色彩感覚豊かな服で自分の美を表現するためには、色あわせに對する知識やセンスも必要とされた。

さらに、外見における美も重要視され、古代の女性は化粧や洗髪など外見を磨くことに努めた。美意識を伴った化粧は6世紀後半隋、唐から仏教とともに紅や白粉、香などの化粧品の作り方が伝わった以後本格的に始まってだんだん發展していった。ベースは白粉をつけて白い顔にし、お齒黒と言って齒を黒く染める習慣があり、さらに、元の眉をすべて抜いて元の眉より上の額の部分に眉を描いていたのは日本の独特な化粧法と言える。特に女性の髪の毛は、その人の美しさを象徴するようなもので、長くて豊かな黒髪が理想とされた。

また、元々備えている外見の美しさや教養以外に、女性美の演出を手助けするものも多かった。化粧をするのと同じように、當時において人と會う時のマナーとして香が必要だったが、これが非常に種類が多くて、個人の美しさや個性を表わすことにも重要な役割をしていた。また、あらわに見せるよりも、ほの見せることによって女性の美しさを神秘的に倍増させる効果を持つものには扇や御簾や几帳などがあり、これも日本の独特な女性美の演出法であったのである。

キーワード：古代日本、女性美、演出、書道、化粧、香、衣装

투 고 : 2005. 11. 30

1차 심사 : 2005. 12. 10

2차 심사 : 2005. 12. 31

住 所 : (323-812) 충남 부여군 규암면 함정리 430 한국전통문화학교 문화재관리학과

電 話 : 041-830-7373(연구실)/010-3454-1267(휴대폰)

e-mail : sirayuki@paran.com